

井戸のそばには、古いこわれた石垣がありました。あくる日の夕方、ぼくが仕事からもどつてくると、ぼくの王子さまが、こわれた石垣の上に、両足をぶらりとたれて、腰をおろしているのが、遠くから見えました。すると、こういつている王子さまの声がきこえました。

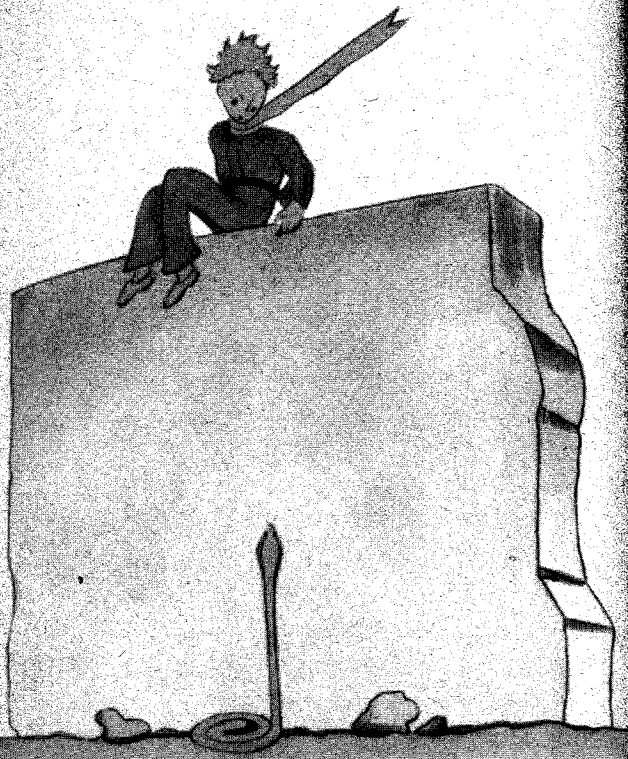
「じゃあ、おぼえていないのかい？ どうもここじゃなさそうだよ」

ほかの声が、きつとどこかで、答えたのでしょう。王子さまが、すぐこういつたのですから。

「そうだよ、そうだよ！ きょうだったんだよ。だけど、場所はここじゃないんだ……」

ぼくは、ずつと石垣のほうに歩いてゆきました。いくら歩いていても、だれのすがたも見えませんし、だれの声もきこえません。が、王子さまは、またいいました。

「……そのとおりだよ。砂の中の、ぼくの足あとが、どこではじまってるか、見ておくれ。ぼくを、そこで待っていていさえすればいいんだ。今夜、そこへいくんだから」



さあ、もう、向こうへ行って……ぼく、下へおりたいんだ！

ぼくは、石垣から二十メートルのところにいましたが、やっぱりなんにも見えません。王子さまは、しばらくだまつていたあとで、またいいました。

「きみ、いい毒、持つてるね。きつと、ぼく、長いこと苦しまなくていいんだね？」

ぼくは、胸がつぶれるような気がして立ちどまりました。しかし、やっぱりなんのこともわかりません。

「さあ、もう、向こうへ行って……ぼく、下へおりたいんだ！」

そのとき、ぼくはぼくで、石垣のねもとのほうを見おろして、ハッと飛びあがりました。そこには、三十秒の間に、ひとの命を断ちきる、黄いろいヘビが一匹き、王子さまのほうへ、かまぐびをつきだてていました。ピストルをとりだそうと、ぼくはポケットのうちをさぐりながら、かけ出しました。しかし、ヘビは、ぼくの足音をきくと、ふんすいの水がだんだん上がらなくなるように、すうーっと、砂の中へすべりこみました。そして、こんどは、そんなにいいそいでいるようすもなく、金物をひきずるような軽い音をたてて、右と石の間にもぐりこみました。

石垣のところへいきついたとき、ちようどうまくおりてくる王子さまを、ぼくは、両腕でうけとめました。その顔は、雪のように白くなっていました。

「いったい、どうしたっていうのかい？　こんどはヘビと話すなんて！」

ぼくは、王子さまが、いつも首にまいている金色のえりまきをほどこしました。こめかみをしめして、水をのませました。ことがこうなつては、ぼくは、もう、王子さまに、なんにもきく勇気がありません。まじめな顔で、ぼくを見つめていた王子さまは、両腕を、ぼくの首にからませました。王子さまの心臓は、鉄砲でうたれて、息も絶えそうになっている鳥の心臓のように、鼓動していました。王子さまは、ぼくに、こういいました。

「機械のいけないところが見つかったよ。これで、きみは、うちへ帰っていけるんだ……」

「どうして知ってるの、そんなこと？」

ぼくは、とてもだめだろうと思つていた仕事に、うまくいったことを、ちようど知らせようと思つて、きたところでした。

王子さまは、ぼくのきいたことには、なんにも答えません。が、つづけて、こういいました。

「ぼくも、きょう、うちに帰るよ……」

それから、かなしそうに――

「でも、きみんとこより、もつともつと遠いところなんだ……もつともつとほねがおれるんだ……」

王子さまがこういうのでは、その身の上に、なにか、なみたいていでないことが、もちあがつているにちがいありません。でぼくは、赤んぼうでもだくように、しつかとだしめましたが、王子さまのからだは、どこかの深い淵にまつさかさまにおちていつて、ひきとめるにもひきとめられないような気がしました……

王子さまは、遠いところで迷子にでもなったように、きつとした目をしていました。

「ぼく、きみがかいてくれたヒツジも持つてる。ヒツジをいれる箱も持つてる。それから口輪も……」

そして、王子さまは、さびしうに、にっこりしました。

ぼくは、長いこと、ようすを見ていました。王子さまは、すこしずつ、元気づいてゆくようです。

「ぼつちゃん、きみ、こわかったんだね……」

王子さまは、こわかったのです。それにまちがいはありません。けれど、王子さまは、しずかに笑っています。

「ぼく、今夜は、もつともつと、こわい思いをするんだ……」

ぼくは、もうどうにもとりかえしがつかないことがおこりそうな気がして、また、胸のうちがつめたくなりました。王子さまのあの笑い声が、もう、二度とはきかれなくなるのだ、と思うことさえ、しんぼうできないことがわかりました。

王子さまのあの笑い声をきくことは、砂漠の中で泉の水を見つけるのと同じだったからです。

「ぼつちゃん、ぼく、あんたのあの笑い声が、もつとききたいんだ……」

けれど、王子さまは、ぼくにこういいました。

「今夜で一年になる。ぼくの星は、^{きよねん}去年、ぼくがおりにきたとこの、ちょうど真上^{まうま}にくるよ……」

「ぼっちゃん、そりゃ、ありもしないこといつてるんじゃないのかい、へびだの、待ちあわせる場所だの、星だのっていう、その話……？　ね、そうだろ……」

けれど、王子さまは、ぼくがきいたことには答えないで、こういいました。

「たいせつなことはね、目に見えないんだよ……」

「うん、そうだね……」

「花だっておんなじだよ。もし、きみが、どこかの星にある花がすきだったら、夜、空を見あげるたのしさつたらないよ。どの星も、みんな、花でいっぱいだからねえ」

「うん、そうだね……」

「水だっておんなじさ。きみがぼくにのませてくれたあの水つたら、車と綱^{つな}で、汲みあげたんで、音楽をきくようだったね……。ほら……うまい水だったじゃないか」

「うん、そうだね……」

「夜になったら、星をながめておくれよ。ぼくんちは、とてもちっぽけだから、どこにぼくの星があるのか、きみに見せるわけにはいかないんだ。だけど、そのほうがいいよ。きみは、ぼくの星を、星のうちの、どれか一つだと思つてながめるからね。すると、きみは、どの星も、ながめるのがすきになるよ。星がみんな、きみの友だちになるわけさ。それから、ぼく、きみにおくりものを一つあげる……」

王子さまは、また笑いました。

「ぼっちゃん、ぼっちゃん、ぼく、その笑い声をきくのがすきだ」

「これが、ぼくの、いまいつたおくりものさ。ぼくたちが水をのんだときと、おんなじだろう」

「それ、どういうこと？」

「人間はみんな、ちがった目で星を見てるんだ。旅行する人の目から見ると、星は案内者^{あんないしや}なんだ。ちっぽけな光くらいにしか思つてない人もいる。学者の人たちのうちには、星をむず

かしい問題^{しだん}にしてる人もいる。ぼくのあった実業屋^{じつぎや}なんかは、金貨^{きんが}だと思^{おも}つてた。だけど、あいての星は、みんな、なんにもいわずにだまってる。でも、きみにとっては、星が、ほかの人とはちがつたものになるんだ……」

「それ、どういうこと？」

「ぼくは、あの星のなかの一つに住^すむんだ。その一つの星のなかで笑^{わら}うんだ。だから、きみが夜、空をながめたら、星がみんな笑^{わら}つてるように見えるだろう。すると、きみだけが、笑^{わら}い上戸^{じやうこ}の星を見るわけさ」

そして、王子さまは、また笑^{わら}いました。

「それに、きみは、いまにかなしくなくなつたら——かなしいことなんか、いつまでもつづきやしないけどね——ぼくと知りあいになつてよかつたと思うよ。きみは、どんなときにも、ぼくの友だちなんだから、ぼくといつしよになつて笑^{わら}いたくなるよ。そして、たまには、そう、こんなふうに、へやの窓^{まど}をあけて、ああ、うれしい、と思うこともあるよ……。そして、きみの友だちたちは、きみが空を見あげながら笑^{わら}つてるのを見て、びつくりするだろう

ね。そのときは、へそだよ、ぼくは星を見ると、いつも笑^{わら}いたくなる。つていうのさ。そして、友だちたちは、きみがきちがいになつたんじゃないかと思^{おも}うだろう。するとぼくは、きみにとんだいたずらしたことになるんだね……」

王子さまは、また笑^{わら}いました。

「そうすると、ぼくは星のかわりに、笑^{わら}い上戸^{じやうこ}のちっちゃい鈴^{すず}をたくさん、きみにあげたよ。うなものだろうね……」

王子さまは、また笑^{わら}いました。が、やがてまた、まじめな顔になつていいました。

「今夜はね、やつてきちゃいけないよ」

「ぼく、きみのそば、はなれないよ」

「ぼく、病氣^{びやうき}になつてるような顔しそうだよ……なんだか、生きてないような顔しそうだよ。うん、そうなんだ。だから、そんなようす、見にきたつてしょうがないじゃないか……」

「ぼく、きみのそば、はなれないよ」

「そういつても王子さまは、心配^{しんぱい}そうな顔をしています。」

「ぼく、こんなこというの……へびのこともあるからだよ。きみにかみついちやいけないからさ……。へびのやつ、いじわるなんだから。おもしろがつて、かみつくかもしれないんだよ……」

「ぼく、きみのそば、はなれないよ」

王子さまは、なにかしら思いついて、安心したようにも見えました。

「そうだ。へびのやつ、二度めにかみつくときには、もう、毒がないんだっけ……」

その夜、王子さまが出かけたのを、ぼくは気がつきませんでした。足音一つたてずに、すがたをかくしたのです。あとをおつて、首尾よくおいつきますと、王子さまは、もう、はらをきめたらしく、あしばやに歩いていました。そして、こういったきりでした。

「ああ、きみか……」

王子さまは、ぼくの手をとりましたが、また、心配でたまらなそうにいました。

「こないほうがよかったのに、それじゃつらい思いをするよ。ぼく、もう死んだようになるんだけどね、それ、ほんとじゃないんだ……」

ぼくは、だまっていました。

「ね、遠すぎるんだよ。ぼく、とてもこのからだ、持ってけないの。重すぎるんだもの」

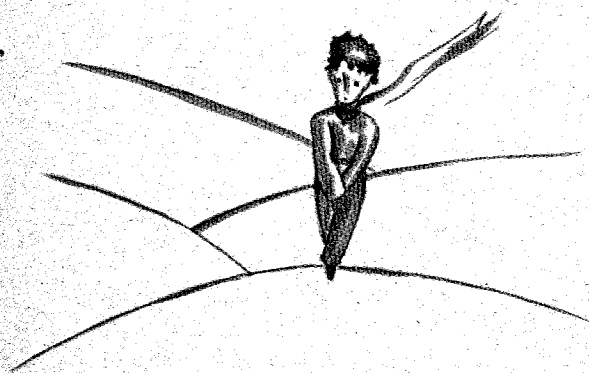
ぼくはだまっていました。

「でも、それ、そこらにほうりだされた古いぬけがらとおんなじなんだ。かなしくないよ、古いぬけがらなんて……」

ぼくはだまっていました。

王子さまは、すこし、気がくじけたようでしたが、また、気もちをひきたてて、いいました。

「ね、とてもいいことなんだよ。ぼくも星をながめるんだ。星がみんな、井戸になつて、さびついた車がついてるんだ。そして、ぼくにいく



らでも、水をのましてくれるんだ」

ぼくはだまっていた。

「ほんとにおもしろいだろうなあ！

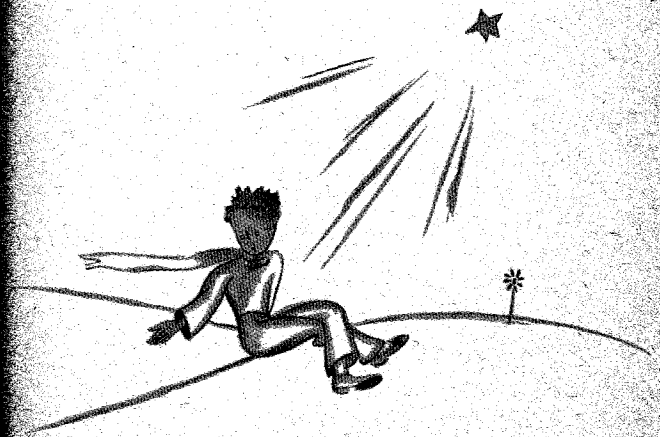
きみは、五億も鈴をもつだろうし、ぼくは、五億も、泉をもつことになるからねえ……」

そして、こんどは王子さまもだまってしまいました。泣いていたからです……

「だからね、かまわず、ぼくをひとりでいかせてね」といって、王子さまは腰をおろしました。こわかったからです。

それからまた、こういしました。

「ねえ……ぼくの花……ぼく、あの花



にしてやらなくちゃならないことがあるんだ。ほんとに弱い花なんだよ。ほんとにむじやきな花なんだよ。身のまもりといったら、四つのちっぽけなトゲしか、もってない花なんだよ……」

ぼくも腰をおろしました。立つていられなくなったからです。

王子さまはいいました。

「さあ……もう、なんにもいうことはない……」

王子さまは、まだ、なにか、もじもじしていましたが、やがて立ちあがりました。そして、ひとあし、歩きました。ぼくは動けませんでした。

王子さまの足首のそばには、黄いろい光が、キラッと光っただけでした。王子さまは、ちよつとのあいだ身動きもしないでいました。声ひとつ、たてませんでした。そして、一本の木が倒れでもするように、しずかに倒れました。音ひとつ、しませんでした。あたりが、砂だったものですから。